2023年度「自由を生き抜く実践知大賞」エントリー一覧　実践事例概要

*№は実践事例名称の五十音順

NO	実践事例名称	実践主体	取り組み内容	実施しての感想	実践事例資料
1	市ヶ谷キャンパスにおける放射線量徹底調査	人間環境学部　松本ゼミ	この活動は、法政大学人間環境学部松本ゼミが、2015年度から現在に至るまで継続して行っている、市ヶ谷キャンパス(富士見校地)の放射線量の調査である。 2011年の東日本大震災の福島第一原発事故によって、都心にも放射能による汚染をもたらした。大学当局は特定の数地点においてのみ放射線量の測定を行ったが、それでは不十分である。測定地点が少ないだけでなく、測定値がその領域の代表的な値を示す保証がないからである。放射線量の把握のためには、放射線量を網の目状に測定することが必要である。そこで本調査では、富士見校地において網の目状に放射線量を測定し、富士見校地における放射線量の分布を明らかにした。この調査により、(1) キャンパス全体にわたり放射線量は安全なレベルであることを確認し、(2) 放射線量が局所的に高い箇所を発見し、(3) 放射線量が高い箇所の一部は固定化されていることも明らかにした。 本調査結果を「市ヶ谷キャンパス(富士見校地)における 放射線量徹底調査に関する報告書」にまとめ、放射線量マップとともに学部のウェブページで公開している。この調査を毎年継続している。	線量計を持ってキャンパス中をくまなく調査することは、ゼミ生たちにとっては忍耐が必要であった。グループごとに領域を分担して測定を進めた。効率の良い調査方針をグループごとに話し合ううちに団結力が生まれた。 キャンパスの再開発によって、立ち入りが禁止される場所が年度ごとに変わり、調査可能なポイントの精査には苦労した。本学の施設部にキャンパス内の地図を提供していただき、感謝している。一方で、初回の調査では、大学担当職員に対して調査結果の説明会を開催したが、2回目以降は報告書を学部事務に提出するのみとなっている。本調査が大学における安心・安全な環境のために、どの程度貢献しているのか、実感がわかない点が問題である。あらためて大学の担当職員に対して説明をする機会を設けるべきか検討している。このエントリーが本調査に目を向けてもらう一助になれば嬉しい。	https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/info/article-20221221142604/
2	NPO法人グリーンアジア	法政大学大学院政策創造研究科　井上ゼミ	2022年10月開催された「JENESYS2022」日中青年環境創生フォーラムを参加し、学生代表として選ばれ、優秀提案賞を受賞2023年8月に、持続可能な社会やカーボンニュートラルに関心のある方を対象に、一つのアジア、一つの未来という理念を挙げ、世界中の学生及び研究機関と協働し、交流・研究活動、広告作成・普及活動などを実施する。学生が主体とする参画を通じ、アジア地域に対する理解を深め、環境問題など社会課題を解決し、愛されるグリーンアジアの創出に寄与することを目的とするNPO法人グリーンアジアを創設した。法人化した以来会員数(特別会員を含む)43名となり、メンバーは主に法政大学、東京大学、中央大学などの大学の現役生、卒業生から構成され、中国、日本、マレーシア、スリランカなど様々な国地域の方が参加されている。教育機関、企業、NPO・NGO組織、などのパートナーと連携し、事業を展開しています。具体的な事業内容:(1)環境の保全に関する知識の普及、啓発及び、情報提供事業(2)国際・文化交流に関するイベントの企画・運営事業(3)機関誌の発行及び、ホームページ等による電子情報サービスの提供事業	指導教員の井上善海教授は理論と実践の融合というコンセプトを持ち、私たちゼミ生に指導している。そこで、法政大学が積極的に発信しているイベントの情報から、日中青年環境創生フォーラムに参加して、優秀提案賞を受賞された。その後、法政大学のSDGs WEEKs企画を参加し、SDGsに関する知識を学び、優秀な卒業生、現役生と出会えた。名取市市長田中さんから応援をいただき、先輩たちのように実行動で地球社会に貢献したく、NPO法人を成立しようと決意した。しかし、NPO法人の成立や活動の実施は簡単ではなく、特に外国人留学生にとって大きな挑戦である。そこで、大学の先生たちを初め、学内外の方々の応援を得って、ゼミの仲間と力合わせて、様々な困難を克服し、ゼロからNPO法人を立ち上げた。つまり、NPO法人グリーンアジアの設立には法政大学の自由と実践知を重視する学風とグローバルな環境が大切だと思う。今後、愛されるグリーンアジアの実現を目指し、より多くの方に持続可能な社会を創出する使命を共有しながら、事業拡大し、国際社会に貢献していきたい。	https://chiikizukuri.gr.jp/blog/2023/04/01/10286/ https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press1_001181.html https://www.jcfc.or.jp/blog/archives/23469 www.npogreenasia.org
3	学校と世界を超えたセパタクロー活動	法政大学セパタクロークラブ	セパタクローとはタイ発祥の足のバレーボールと呼ばれる球技で、マイナースポーツ故、 大学生から始める人が多い。私は中学生からこの競技を始め、大学生になり、法政大学でセパタクローを始めようと思っていた矢先、法政大学のセパタクローサークル(通称　ホセパ)は廃部になっていたことを知った。その後、セパタクロー元日本代表の方や、亜細亜大学セパタクロー部の方々に協力していただき、２０２３年４月、亜細亜大学セパタクロー部の一員としてともに練習、大会にも出場した。しかしその大会直後、亜細亜大学体育会の方から他大学は受け入れられないという通告があり再び大学探しに奔走した。 そして私が法政大学の新勧の際たまたまセパタクローをやっていた先輩に出会い、その方の紹介で東京大学セパタクローサークルに加入した。現在は東京大学に加え東京工業大のサークルの練習にも参加しており、そのサークルの方々や、ホセパのOBの方々に協力していただきホセパ復活に向け活動している。また先日日本セパタクロー協会支援の下、世界ランキング１位の元タイ代表レモン氏に練習に参加いただいた。彼とはその後も交流があり、今では私の良き師である。	セパタクローはボール一つで世界とつながれるスポーツです。サッカーと違い、ヨーロッパ主導のスポーツではなく貧しい国の人々も街中で老若男女輪になって一つになれる競技です。その面白さは世界まだまだ知られていません。私はこの面白さを発信したいのです。法政の実践知とはこうしたスポーツを通して貧しい国も富める国もボール一つで言葉を使わずとも一体となり会話できお互いのことを分かり合う。こうしたことが一つの方法ではないでしょうか。セパタクローは日本ではメジャー競技ではないために、練習場所の確保、大会の運営、選手同士の交流などみんな手弁当一つでボランティアで成り立っています。私もこうした先輩たちの姿を中学生の時から見聞きして手伝ってここまで競技をつづけてきました。そして大学生になった今セパタクローという一つのスポーツで学校を超え、世界を超えた交流を築くことができました。これこそまさに普通や常識にとらわれない「自由を生き抜く実践知」だと私は思います。	https://atlas-career.jp/utmap/club/497
4	「継続は力なり　やり抜く力」	通信教育部　市ヶ谷グリット	市ヶ谷グリットは2023年4月より、通信教育部の学生会サークル「市ヶ谷パッションズ」の有志活動(部活動)としてオンラインを活用した学生同士の学び合いの機会創出の仕組みつくりを行ってきた。 具体的な実施内容は2点で、①小グループ勉強会　②メンター＆メンティー の活動を行ってきた。また、従来のZoomから気軽に使えるオンラインシステムgoogle meetを活用した。 活動の特徴は、①②ともに、活動期間の期限を決めて実行し、やり抜くことを重視した。活動期間は 1か月～4ヶ月と内容に応じて参加者同士で決めることとした。活動に期限があることで短期集中することができた。 　学生同士が互いに学び合い、諦めず取り組み、継続することで目標を達成する活動となったことから、今回の実践事例名称を「継続は力なり　やり抜く力」とした。	通信教育部の学生は社会人学生であったり、仕事+学びの2way player(２刀流)、更には+家庭生活を加えた3way playerも少なくない。そのため、思い通りに学びのための時間確保することや、モチベーションを維持するのは至難の業であるともいえる。そんな環境の中で「学び合い」を大切にした活動を創り上げたいと考えた。 市ヶ谷グリットでは「どこかのだれか」ではなく最初にメンバーを募り、「チーム創り」を根幹においた活動であると振り返る。 「このチームでやり抜く」を合言葉に活動を進めることができた。 しかし市ヶ谷グリットの各プログラムに参加したメンバー全員が目的の単位を修得できた場合と、順風満帆とは言えず悔しい結果もあった。でもたとえ全員が目標達成できなくても、誰か一人でもチームで目標達成したのなら、その喜びをメンバーで共有し、「次は自分だ！」と奮起する単位取得のための情熱が連鎖し、前に進むことができた。このことは法政大学における「自由と進歩」に沿うものであり、苦楽を共にした仲間といつかは喜び合える、それこそ「法政らしさ」であると感じられている。	
5	小金井オープンキャンパスの企画運営	小金井オープンキャンパススタッフ	2023年8月5日に法政大学小金井キャンパスにおいて実施されたオープンキャンパスに向けて約一年前から学生主体で企画運営を行った。主な当日の活動内容としては、来場者へのキャンパス内の案内・学科ごとの個別相談・学生による学部学科説明・キャンパスツアー・作成した動画の上映などをチームに分かれて行った。また、今年から新しい試みとして付属校の保護者へのキャンパスツアーを行った。それまでの準備としては以下の流れで行った。１０月～４月ごろまでに、当日の企画を考えることや昨年度から継続しているスタッフのチーム練習や動画の作成を行った。４月～５月にかけて学生による新規スタッフの募集・採用面接を行う。６月～７月スッタフ内交流やチームにごとの活動を行った。８月には本番に向けた直前練習とキャンパス内の装飾を行った。チームごとの活動とは具体的に、チームリーダーを中心として空きコマを利用して、スタッフ同士による個別相談やキャンパスツアーの練習や学部学科説明に使うスライドの作成と発表練習、キャンスや学科の魅力を紹介する動画の作成をした。その他、当日スタンプラリーをした来場者へ配られる景品のデザイン・発注を行った。	毎年開催されているオープンキャンパスは学生が自ら企画しキャンパスツアーや個別相談、来場者の誘導などを行っています。去年の10月から新規体制として2023年度のオープンキャンパスが始動しました。今年は、事前予約なしで対面でのオープンキャンパスというコロナ禍以前と全く同じ状態での久しぶりの開催であったため、キャンパス内での誘導を行うチームを作り直すことや付属校の保護者に向けたキャンパスツアーなど昨年度と変更しなければならない点があった。しかし、１人で抱え込むのではなく頼れる先輩や同期、後輩たちと協力することで前日までに万全の準備をすることができました。また、本番には想定を大きく上回る4000~5000人の方に来場していただき、もともとの打ち合わせとは違う動きを強いられる場面も多くありましたが、学年を問わず全員が臨機応変に動き、適切な対応をすることができました。その証拠に来場者からのアンケートにはたくさんのお褒めの言葉をいただきました。今年のオープンキャンパスから私は臨機応変に対応する重要さと色々な人に頼り協力する重要さの二つの重要さを改めて考えさせられました。	https://nyushi.hosei.ac.jp/koganei-oc
6	こだわり抜いた先にある「光」	理工学研究科電気電子工学専攻笠原研究室	我々の研究室では，従来の延長線上にない発光デバイスの研究をしている．より明るく，長い時間光らせられるよう，より適したデバイスの構造や発光性材料を日々探求している．粉末の発光性材料が溶けた溶液を光らせるという点が，当研究室で作製するデバイスの特徴である．この研究が発展すれば，次世代のディスプレイなど多くの応用の可能性が期待できる．2020年以降，小金井キャンパスの当研究室の修了生らが筆頭として複数件の論文を発表してきた．加えて，2ヶ月間のMost Downloaded Papersの第3位に選出された論文をはじめ，数々の賞を受賞している．現役の学生も成果を更新しており，研究として日々こだわり続けている部分が様々なところで評価を受けている． 研究で得られた技術や知見をこだわり抜き，その成果として「世界でたった一つの発光デバイス」の作製方法を確立した．このデバイスは，学会の研究発表に用いられるだけでなく，オープンキャンパスなどの研究室紹介でも披露され，老若男女問わず多くの関心が向けられた．特に，法政大学のロゴや校章の形に発光するデバイスは様々な場所で注目を集めた．	研究は世界でまだ誰も触れられていない部分に触れ、それを明らかにするという，とてもやりがいのあるものだと日々実感している．実験を進めて行く中で，時には困難に直面することもあるが，研究室内の指導教員や学生とのディスカッションを通じて，生じた問題を一つずつクリアできたことから，周囲の人と協働することの重要性を学んだ．また，課題に対して自由な発想でアプローチしていくという「大学生・大学院生らしさ」のある環境で，充実した研究生活を送ることができている．現在，私たちは大学院生として研究活動に取り組んでいるが、学部生のときからの基礎学問の知識が研究において強力な基盤となっていると考えている． 私たちが研究活動の中で最も興味深いと感じているものの一つが「世界でたった一つの発光デバイス」である．デザイン・作製・評価をすべて自分の手で行い，そうして作ったデバイスが多くの人に認識され，好評を受けたことは非常に嬉しい経験となった．この「世界でたった一つの発光デバイス」が高校生の目に触れて，理科学の世界の面白さを感じ，我々の研究室や法政大学，そして科学の分野への興味を持ってもらうきっかけになればと思う．	https://www.youtube.com/watch?v=7yQwQiXMcqg https://www.hosei.ac.jp/info/article-20220628144914/ https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1388248121001314?via%3Dihub https://www.hosei.ac.jp/koganei/info/article-20220113145559/ https://www.hosei.ac.jp/koganei/pickup/article-20211203101555/ https://www.jstage.jst.go.jp/article/electrochemistry/91/4/91_23-00007/_article https://www.hosei.ac.jp/gs/riko/info/article-20230620152312/
7	時間割お助け隊	経営学部学術ゼミナール委員会	経営学部の2023年度の新入生が学部ガイダンスを受けてから時間割作成を行う期間(4月1日～7日)に、大内山校舎1階ブースによる対面相談会、或いはTwitterの質問箱の設定, Instagramを通じたアナウンスなど、新入生の時間割作成をサポートする活動を行った。時間割作成の基本的な流れの説明から、単位数の計算法、抽選科目の履修法など、新入生が持つ疑問に先輩が自分の経験を元に答えることで、大学に入学したばかりの新入生が最初に越えるべき関門に対して、手厚いサポートを行う事ができた。	今年は例年に比べても相談件数が多かった。相談内容として、専門科目と教養科目のバランスに関する事が多かったが、既存の大学組織では答えにくい内容で、当該学部の学生だからこそ対応できた様な内容であった。そう言った意味では、新入生にとっては意義のあるサポートだったと思われる。また、対応した学生スタッフにおいては、相談が一時的に集中してできた行列の処理や、積み残しの翌日対応など、想定していなかった事態についても見事に対応して業務を遂行してくれた。 その後の報告事項などを見ると、学生スタッフ達も今回の活動によって成長してくれたことが判った。	
8	卒業生や他校生と切磋琢磨した音楽部	法政高校音楽部	2022年度音楽部は創立25周年イベントを開催。現在部員数は48人で、合宿で全バンドがオリジナル曲を作り、他校との合同ライブ等で切磋琢磨した。4ピースバンド「The Bee's Knees」は結成して3年目。高校生ライブMUSIC DAYS 2022、2023 東京大会で優秀賞、2022のファイナルは特別賞を受賞。とうきょう総文2022に東京都代表として出場。2023年度は都大会で準グランプリ受賞、全国大会に出場したほか、第3回高等学校軽音楽コンテスト関東大会(主催NPO法人、後援文化庁)にてグランプリ受賞。「イイネに振り回されず、自分らしく生きていたい！」(2023年度都大会パンフレットより)。JVCケンウッド・ビクターエンターテインメント新人開発チームと小学「Steenz」による楽曲制作プロジェクト「from00」に参加。各配信サイトにて音源リリース。第7回ガールズバンドステージコンテスト2023 高校生本選全国決勝大会にて高3バンド「PIECE OF CAKE」がグランプリ受賞。高2バンド「FLARE」「Maiden Boys」「Papilio」も都大会準決勝に進んだ。	法政高校音楽部は、自主性を重んじ、音楽のセンスを磨き、音楽を通して様々な面で成長し、学校生活で活躍すべく、日々活動している。音楽部は、17年前まで活動していたギター部と軽音楽部が統合、2007年から始まった。法政大学の「自由と進歩」の建学の精神の下、法政中高の「自主自律」の「自由な」校風の中で、週4回(パート練・バンド練・ミーティング)の活動、オリジナル曲の作成や、他校との合同ライブや外部の大会等に積極的に出場した。コーチ陣をはじめとしたOB・OGや他校の軽音楽連盟関係者など音楽を愛する多くの方に関わって頂き、部員1人ひとりが ～自分探しの旅～ を3年間する場となっている。中間発表(演奏後、部員・顧問による投票と全員からコメントをもらう場)、ライブ、大会というサイクルを実践していく中で、自らの声と言葉で、自分らしい音楽表現を、試行錯誤しながら掴み取る作業を繰り返した。音楽に真摯に向き合い磨き合った結果が、これまでの公式戦での成績や文化祭ライブでもいかされ、その結果1,500人以上の方に音楽室Aに足を運んで頂くことに繋がった。	https://x.com/hoseirock?s=21&t=hBaBJHIKxVdNg1n3JR5H5A https://drive.google.com/file/d/145NvLtmsh_8vcXBSVauyrHAyJymtlUzX/view?usp=sharing
9	DIVERSITY WEEKs 2022	ダイバーシティ推進委員会	ダイバーシティ推進委員会主催で、学内のダイバーシティ意識の醸成等を目的に「HOSEI DIVERSITY WEEKs 2022」を初開催した。本委員会では、従来は主に教職員を対象としたシンポジウム等を実施してきたが、学生も対象に計6つのプログラムを企画・実施し、延べ1,100人を超える方が参加した。「HOSEI DIVERSITY 講座シリーズ」では6名の本学教員による、ダイバーシティをテーマにした講座を計10本オンデマンド配信し、受講者からの満足度も高かった。また、メディアラウンジに「レインボーラウンジ」を設け、専門スタッフが常駐し、性の多様性に関する情報発信や交流、個別相談を行い、期間中120名以上の学生・教職員の方が訪れた。初めての企画だったが、ダイバーシティ関係の研究や活動を行っている本学の教員や学生等の力を結集して、多角的にダイバーシティを学び考える機会を提供できた。	事務局だけでは力や資源が限られているが、協力を依頼した教員や学生が快く企画に協力してくれ、これだけ大規模で充実したプログラムを実施することができた。ダイバーシティに関する本学が持つ教育、研究、学生などの力の大きさを実感し、それらの知見や力を集めてつなげることで、大学のダイバーシティ化の実現に向かって、大きく歩みを進めることができると感じた。	https://www.hosei.ac.jp/diversity/hosei-diversity-weeks/ https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20221208140852/
10	大学院内で起業　～同期の垣根を越えて～	IM総研特任研究員　兼　IM特任講師	法政大学ビジネススクールイノベーションマネジメント研究科(IM)の同期4名で2023年5月に企業研修会社(以下株式会社サーカス)を起業した。 株式会社サーカスでは、ボードゲームを活用した企業研修を行なっている。創業の経緯は、当社代表宇都宮が入学前から抱いていたボードゲームによる学習を広めることで、大人が楽しく学ぶ社会を作りたいという想いと、当社役員片野が自身の研修会社で感じていた、もう少し楽しく学習させるコンテンツを作成したいという想いが合致し創業しようと考えた。そして、同ビジネススクールのカリキュラムにある創業・ベンチャー論にて、起業するためのビジネスプランをチームで考え発表するものがあった。その中で、４人は同じチームを組み、一緒に切磋琢磨する中で共に創業しようと相談し創業した。 すでに7月に東京ビッグサイトで開催されたDX Expoに出展し、多数の企業と取引を行なっている。実際の企業研修を行う中で、企業が抱えているコミュニケーション不足や相互理解ができていないなどの課題を解決できると評価を得ている。今後、企業規模拡大に伴いIMの卒業生に講師を依頼し、雇用促進を図っていく予定である。	実施して感じたことは、IMに向上心が多い同期がおり、また実務に直結する授業カリキュラムになっているということ、そして親身に相談してくれる教授陣のありがたさである。自身が社会人を経験する中で、ビジネスプランを周りに話しても無碍にされてしまう経験を多くしてきた。しかしIMでは相手の考えを尊重し、しっかりと傾聴してくれる仲間が多くいると感じ、その支えのおかげで起業することができた。 また、実際に起業するきっかけとなったのは、IMが実施している授業内での取り組みにである。ビジネスプランをブラッシュアップする中で、お互いのことをしっかりと理解し、起業しようと考えることができた。実務にしっかりとつながる内容だからこそ達成できたと感じている。 最後に、起業するにあたりさまざまな教授陣にご相談に乗っていただいた。自分たちの主査の教授だけでなく、授業でもご一緒した事のない教授も親身になって相談に乗ってくださり、IM全体で応援していただいたと感じ、非常に参考と励みになった。今後は起業を成功させることで、卒業生の雇用促進や大学院のアピールをすることで大学側に貢献することで、恩返しをしていきたいと感じている、	https://sirkus.co.jp
11	大学生活全般に関する相談窓口の実践	「先輩学生による相談窓口」学生スタッフ	社会学部において、相談者(主に新入生)が充実したキャンパスライフを送れるよう、社会学部の先輩学生による相談窓口を実践しました。時間割の組み方、大学生活などをはじめとする661件(昨年度:262件)もの相談に対応し、相談者の不安を解消しました。	2年目を迎えた「先輩学生による相談窓口」は、活動継続の学生の他に新規の学生が加わり、組織として厚みが増した中で実施することができた。昨年とは異なり、継続の学生スタッフが中心となって組織をまとめあげ、昨年の経験を生かした取り組みを行えたこともあり、相談件数は昨年度を大きく上回ることができた。相談者の中には、来年の学生スタッフ加入を希望する者がいたので、更なる飛躍を期待している。	https://www.hosei.ac.jp/shakai/info/article-20230419100349/
12	第40回スポーツフェスティバル	スポーツフェスティバル学生実行委員会	2023年5月19日、法政大学多摩キャンパスにて、「第40回スポーツフェスティバル」を実施した。本イベントは多摩キャンパス開設以来、毎年恒例の新入生歓迎を目的としたイベントであり、学生実行委員と教職員が協働して創り上げている。今年度は、新型コロナウイルスの制限緩和を受けて、コロナ前と同程度まで規模を大きくして開催することができた。 競技は、フットサル、ソフトボール、ドッジボール、バレーボール、卓球、応援団やサークルのパフォーマンス、学生実行委員種目(フレスコボール、フリスビーストラックアウト、輪投げ)を実施した。他にも初の試みとして、多摩キャンパスで活動している体育会サッカー部やラグビー部、馬術部(当日雨天中止)とコラボし、PK対決やタックル体験などの交流種目を実施した。 当日は昼頃から雨が降り、フットサル、ソフトボールが途中で中止となってしまったが、多摩キャンパス生はもちろん、市ヶ谷キャンパス生のエントリーもあり、延べ約1,300人の学生が参加し、成功を収めることができた。また、参加者同士の交流も多く、今年度のスローガンである「スポーツで広げよう心の輪」も達成することができた。	昨年実施した「スポーツフェスティバル」に比べ、実行委員の人数や参加者が増え、大規模に開催することができた。また、実行委員の人数が増えたことで運営として関わることができる幅が広がり、実行委員側の充実度も上がった。 昨今の新型コロナウイルスの影響で、今年が制限緩和後初めての大規模開催だったため経験者がいないという問題点もあったが、できること・やることを明確にし、役割分担をしながら仕事を遂行することができた。 一方で、学生の認知度が低く、エントリー開始後も参加者があまり増えない問題が発生した。そのため、自分たちでポスターを作成し、各学部の掲示板に掲示した。加えて、昼休みの時間に守衛坂でビラ配布を行い、また体育会学生の使用頻度が高い青バス内にもポスターを掲示するなど、積極的な広報活動を行った。その結果、当日は約1,300名の学生の参加があり、見事成功を収めることができた。 来年以降は、今年の経験を生かし、よりパワーアップした「スポーツフェスティバル」を開催するとともに、今年度から12月頃に実施する予定の実行委員の独自イベント「すぽたま」を通して、多摩キャンパス全体を盛り上げていきたい。	https://www.hosei.ac.jp/pickup/article-20230531153920/ https://www.youtube.com/watch?v=k8b65RJ6LA8
13	文学部創立百周年記念事業	文学部創立百周年記念事業実行委員	2022年10月15日に、文学部創立百周年記念事業実行委員を中心として、法政大学文学部創立百周年イベント「文学部の過去・現在・未来－百年間のたからもの－」をYoutube Live配信にて実施した。本イベントは2部構成で、第1部として「法政大学能楽研究所による講演・ワークショップ」、第2部として「6学科名誉教授によるシンポジウム「文学部の過去・現在・未来―百年間のたからもの―」」を実施した。 さらに、文学部6学科の「過去・現在・未来」を動画で巡ると題し、各学科で動画を制作し公開、「新しい市ヶ谷キャンパスの紹介」を制作・公開、「文学部創立百周年記念誌『文学部の百年』」を製作・公開した。 コロナ禍での実施となり、何度も企画を見直すことにはなったが、文学部の事跡と意義を広く発信することができたと考えている。 すべての企画をWeb上で実施したため、現在でも、動画・ダウンロード版ファイルの公開を継続しており、教職員・在学生・卒業生はもちろん、受験生含め、文学部と繋がってくださる皆様に向けて、持続的に「文学部の百年」を発信し続けることが可能になっている。また、これらはそのままアーカイブ化可能である。そこに大きな意義があると考えている。	今回目的とした、文学部の事跡と意義を広く発信するという意図は、十分に形にすることができた。文学部と関連の深い能楽研究所の周年記念事業との連携も成功し、各学科の力を結集した記念誌もまとめることができた。 記念事業を進める上で最も大きな障害となったのは、やはり新型コロナウイルス感染症であった。百周年イベントが対面開催できずにオンライン中継での対応となったことは、学部・学生・卒業生が一堂に会して参加する機会が得られなかったことを意味しており、学部としての一体感を十分に醸成することができなかったのではないかと危惧しているところである。 こうした厳しい状況が生じた一方で、インターネット環境を活用することによってこれまでにない記念事業になったことも見逃してはならない。イベントの動画も後日視聴できるようにまとめ直してホームページで公開し、記念誌もダウンロードできるよう配置した。映像を中心として事業全体をホームページにまとめてデジタル公開したことは文学部にとって初めての試みでもあった。今後の同種の企画に与える影響は決して小さくはないと考えているところである。	https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/100/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54
14	弁論部HLAB留学、日中学生会議、訪中団	弁論HLAB、留学、日中学生会議、訪中団	HLAB 2023年8月群馬県での高校生のためのサマースクールに向け、海外大生と協働して一つのものを創り上げました。海外大生との議論を通じて、英語力が向上し、視野を広げることができた。訪中団 2023年11月の訪中団として選考の末、ご縁を頂きました。現地での訪問に向けて学習をしています。また、その経験の実践の場として日中学生会議実行委員という場に身を置きました。法政大学の生徒は、1人だけで他大学と海外大生そして企業や中央官庁を相手に活動しています。企業や官庁にどういったメリットを与えつつ、こちら側にも良い環境を整えることができるか考えながら、活動に取り組んでいます。	HLAB、外務省後援日中友好会館主催の訪中団、日中学生会議。これらの活動の原点は、法政大学です。法政大学での弁論部活動で議論する楽しさと論理性を追求し、質の高い議論の仕方を学びました。そのことは全ての活動に生きています。オープンキャンパスリーダーズでは、高校生対応が求められました。HLABでの活動にとても役に立ちました。また、SAアメリカ留学は、私の人生を変えました。留学を経て多くのことを吸収したことを是非皆さんの前で共有したいです。海外や海外の人との協働することが自分にとって遠いことだと思っていました。しかし、それは間違いでした。そう思えるのは、私の経験によるものだと思います。貴重な経験ができたのはこれだけの良い環境を整えてくれた法政大学のおかげであると思います。そのことを本当に実感しました。それが感想です。背中を押してくれた法政大学に恩返しができるようにその一歩として今回応募させて頂きました。また、1番は廣瀬総長と話したいです。	https://h-lab.co/summer-school/gunma/ https://h-lab.co/ https://jcsc-japan.org/ https://www.jcfc.or.jp/blog/archives/24389
15	法政大学起業家教育ブートキャンプ	3付属校(含2協定校)生と大学生	社会と広義に連携した教育プログラムとして「アントレプレナーシップ教育」の必要性が掲げられている中、大学のリソースを活用し、本プログラムの受講を通じて、「自ら学び、考え、課題を見つける力」の涵養を図ることを目的に開講した。 高大連携事業の一環として、アントレプレナーシップ教育プログラムを実施した本プログラムは、日本政策金融公庫主催「創造力、無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ」への応募を目的に、講義やワークショップ等を行うアントレプレナーシップ教育プログラムであり、3日間(8月7日～9日)のプログラムを通して、実際に応募書類の作成を支援するプログラムである。 具体的な事例としては、日本政策金融公庫より講師を招聘し、社会連携を意識しつつ、参加者が主体的な学びを得るプログラムとして構成し、学部生をメンターとして、各チームに配置して高校生の主体性を伴走支援した。更には、実際の起業家でもある姜理恵研究室所属博士課程社会人院生も参加、助言等を行い実践的な視座を養成した。	本プログラムは、プログラムコーディネーターであるデザイン工学部姜理恵教授と同研究室ゼミ生らがメンターとなって運営し、当日は法政大学の3付属校や協定校(三輪田学園・横浜創英)の高校生32名が参加した。1日目は日本政策金融公庫による講義とグループワーク、2日目はビジネスアイデアの検討・ビジネスプランの作成、3日目はプレゼンテーション、最後に審査・表彰・講評を行い、実践的にビジネスプランを作り上げるための手法を学んだ。参加した高校生は9月末の高校生ビジネスプラン・グランプリの応募に向けて引き続き、各チームでビジネスプランの策定を進めている。高大連携のもと参加した5校の高校の枠を超えたグループ分けにより、コロナ禍で途絶えた高校間の交流を促進した。参加者は、本プログラムの受講を通じて、「自ら学び、考え、課題を見つける力」等を獲得することができたと考える。本プログラムに参加した幾つかのチームは、9月末日が期限となっている日本政策金融公庫主催「創造力、無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ」へ実際に応募し、11月下旬にフィナリストが発表される予定である。※3日間様子を短編動画で公開	https://www.hosei.ac.jp/press/info/article-20230921133544/ https://www.u-presscenter.jp/article/post-51551.html https://www.youtube.com/watch?v=70QmixPaU24
16	法大生の誇りを可視化して伝える	経営学部吉田健二ゼミ	2023年2月、神奈川県にあるアレセイヤ湘南高等学校の総合学習の時間に、法政大学の魅力について高校二年生250人の前で講演を行った。テーマは「データ祭」。このイベントの2ヶ月前に私の所属する吉田ゼミでIT企業との産学連携プロジェクトに取り組み、データ分析ツール(Tableau)の新たな利用シーンを提案した。その際ビジネスツールであるTableauの具体的なイメージを持てず難航し、社会人ユーザーが集まるイベントに学生一人で参加した。そこで得た社会人との繋がりを通じ、提案発表に活かすことは勿論、Tableauの学習を始めた。社会経験がない中でも恥じず質問し、輪に溶け込む中でデータ祭を含む多数の依頼を受けるようになった。データ祭では、若いうちからデータを活用する重要性を教育するために社会人講演者を招聘しており、高校生にとって私以外の講演者は年齢が一回り離れていた。いかにデータの身近さと面白さを伝える方法を考えた。私は一年時からオープンキャンパスでツアーガイドを務めている。この知識をTableauで可視化し、データ化、法政大学、大学進学について高校二年生が興味を持つ内容を講演した。	私は学校の枠を越えて社会を理解したく、産学連携の活動ができるゼミに入った。この決断は、自分の意欲を尊重し、後押ししてくれる環境のおかげで実現した。物おじせず新しい世界に挑戦する姿勢と、世代を超えた様々な価値観を持つ人と溶け込む長所を発展することができた。 私は、多角的かつ広義な視野をもって意思決定できる人を目指して学生生活を送ってきた。積極的な情報収集、そこで繋いだコミュニティの人々と共に学ぶことで、自分の視野を大いに広げた。そして、これらの知識や洞察を他の学生と共有することで、学生と社会の繋がりを強めていきたいと感じた。そのため講演者として発信活動ができていることを嬉しく思う。またそれをSNSで発信することで、更に他校の学生へ発信や交流機会を増やすことができた。 産学連携の活動が終了しても、コミュニティを基盤に情報収集と知識共有を並行して続けている。 法政大学でのゼミ活動、キャンパスツアーガイドとしての活動は、すべて学生主体の活動であった。これにより、本来の活動が終了しても、自分の活動領域を拡大し、二つの経験を結びつけて新たな成功の場を見つけることができた。私はこのことを誇りに思う。	https://www.youtube.com/watch?v=ysa3mi8MINA https://public.tableau.com/app/profile/ryoka2222/viz/Viz_16728507684550/sheet16
17	留学生と日本人を繋ぐ起業家教育プログラム	経営学部	ビジネスプランコンテストのプログラムを全学向けに日本語と英語併用で実施した。本プログラムは、世界110カ国、700以上の都市で開催されてきたStartup Weekendである。本プログラムを採用したイベントは、イノベーションマネジメント研究センターが2013年度から4回、実施してきた。今回は、経営学部が主体となって実施した。本ビジネスプランコンテストは3日間という短い期間にプロジェクトの立案からプレゼンテーションまで行い、起業家やベンチャーキャピタリストに審査してもらう。擬似的に起業チームを組成して活動することは、自分の能力やキャリアと向き合う機会となる。今年度は、日本語課程とGISやGBP等の英語課程も対象として募集した。日本語と英語の混成チームを編成して実施し、最終のプレゼン資料は英語、発表はどちらでも可能とした。日本人学生にはグローバルな視点で思考すること、留学生には日本社会と経済を若い目線で理解できる学びの場となることを目的とした。英語課程はGIS２名、GBP2名、EMBA1名の参加があり、日本語課程は経営学部と国際文化学部から 28名の参加となった。	チームメンバーを募るために自らのアイデアを披露したものは過半を超え、リーダーシップを取ろうとする学生とそれを支える学生のコラボの場となった。メンバー間の英語と日本語の相互理解は、バイリンガルのメンバーがいなくても、丁寧にコミュニケーションをすることと、役割分担をすることによって克服していた。コーチ役と審査員役には、現役の起業家やベテランの投資家が招かれた。それらバイリンガルなコーチ役や審査員役が日本語と英語を使って、アドバイスや問いかけをすることは、大きな刺激と学びになった。暑い最中であったが、東京駅や浅草に潜在顧客の声を求めてフィールドワークも行い、密度の濃い三日間になっていた。終了後も活動を継続して大きなコンテストに応募を狙うチームもある。また、学部を超えるネットワーク形成ができたという声もあった。 反省点は英語課程からの参加者が少なかったことであり、時間をかけた告知が必要になる。今回はコーチ役と審査員役総勢8名中2名が法政OBであった。次回は、もっと多くの法政OBに協力を仰ぎたい。	
18	若者と地方で生まれる「北海道」での挑戦。	公益財団法人 地域育成財団	2023年9月12日、北海道札幌市、北海学園大学にて”自治体と大学の連携による地方創生”や地域育成財団の奨学金を受けた”大学生が実施した地方創生活動”の講演会を実施。 公益財団法人 地域育成財団 1期生に所属している私は今回300人の奨学生の中から選出され、代表奨学生として大学在学中に実施した地方創生活動を30分ほど発表。 当日は会場に70人以上とオンラインに地方創生を模索中の地方自治体、民間企業、学生が300名以上参加。講演者は地域育成財団の創設者である”おそうじ本舗”を350億円で売却した「長谷川芳博」氏、法政大学出身の地域育成財団「横尾隆義」代表理事、や基調講演として「グローバルトップ100」されているニセコの「片山 健也」町長が講演。 その後私の発表が有り、高校進学時に東京から内閣府が提供している”地域みらい留学”を使用し、北海道奥尻島に留学した経緯や、過去30以上のインターンにジョインしたこと。大学2年時に北海道三笠市、真狩村、音更町で地域研究を行い、最終日に自治体に提案した事例などを発表。結論として『地域は”人の魅力を底上げする潜在的な価値”が眠っていること』を力説。	フォーラム終了後は50名以上の参加者から沢山のコメントを頂き、ニセコ片山町長や民間企業からからも大成功に終了したと思う。 当時の北海道札幌市は、本番直前の11時から突如の雷と強い雨風、夜かと思う暗闇。全国ニュースにもなった、恐ろしいほどの嵐で誰も会場に来ないと思っていた。 しかし現実は違い、申し込んでくれた９０％が悪天候でも足を運んでくれたことに感動した。 特に印象深かったコメントとして「日本はまだまだ底力があると感じる講義だった」「佐藤さんのような活動やパッションの熱い学生が「個」として存在すること自体に勇気づけられ、彼のような志や熱量を持つ学生が互いにつながり合い、刺激し合うことができれば、本当に日本を変えていくことができるのではないかと感じました。」といったコメントは私も感化させられた。 最後に今回のフォーラム主催者であり、私が所属している公益財団法人地域育成財団の横尾代表理事からも「今回のフォーラムも本当に素晴らしかったよ!法政大学の先輩として本当に誇らしい!またよろしくね」と言われ、改めて法政大学でこの地方創生を学習できるこの学部で良かったと感じた。	https://chiiki-ikusei.com/news/20230912 https://chiiki-ikusei.com/news/forum20230912 https://chiikiikusei-forum230912.peatix.com/ https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/718338?display=1 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000008.000120300.html